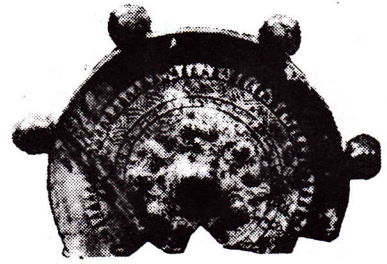


文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七 鈴 五 獸 鏡

篠脇城跡に立ちて

会長 土 松 新 逸

終戦後郷里へ引き揚げて後、旧山田村、郡上高校・岐阜県などに勤め、退職後昭和四七年四月から大和村史編集をお手伝いすることとなり、同事務局と文化財関係の事務も取り扱うこととなった。

そのころ大和村では、小間見川がオオサンショウオの生息地として国より指定されていただけで、ほかに文化財的処置の与えられたものはなかった。勿論篠脇城跡も史跡としての指定はされていなかった。そのころ岐阜県城館長郷浩氏は早くから篠脇城跡に関心を寄せておられた(当時篠脇城跡実測図が作られたのも同氏のはからいであった)が、この城跡を早く「史跡」に指定するようアドバイスをうけた。

まず県の条例、文化財指定要項に倣って村文化財の指定条例・要項を制定していただき、第一番に篠脇城跡が村史跡に指定され、続いて昭和四八年一月一日、県史跡に指定されたのであった。

そのころはまだ、しの脇山麓は普通の田畑であり、登り口の田の中に表門跡と思われる三個の礎石と称する石が並んでいた(後のほ場整備工事の際にこの石の付近を調べたが何も見付からなかった)。

昭和五四年ほ場整備工事の際、東氏館跡が発見され、五五年から五八年にわたり第一回発掘調査が行われ、検出された庭園(殊に池泉部)のすばらしさから国の名勝に指定された。その後二回の追跡調査にて館跡の全貌がわかり一部の補強整備がなされ、また、古今集ゆかりの植物を植えて「古今植物園」が造成された。

篠脇城跡と筆者とは不思議にいろいろ因縁がある。自分事でも一寸恥ずかしいが、私は幼くして母をうしない亡母の生家の祖母に育てられた。しの脇山の大部分は往時からその家の持ち山であったので、この山を幼いころから親しんでいた。そのころはこの山を「城山」と呼んでいたが、今日のように「史跡」文化財として見ることはなく山は農業の資源として大切に切り扱われ、春は田へ入れる緑肥(雑木の若芽の伸びたのを細い枝ごと刈りとり田へ入れた)を採り、夏は馬の飼料の草を採り、秋には屋根を葺く萱を採り、冬には薪を採る場として大事にされた。農家の男の子は小学校五年のころになると百姓の手伝いになり出されたが、私もよくこのしの脇山へ草刈りに登ったものでした。頂の広場で刈った草を背負

って下りると疲れるので、若木を伐って「そり」の様にして刈った草を載せ堀を引いて下りたこともあった。だからこの山は親しいというより労働をさせられる場であった。勿論「史跡」という考えは全くなかった。しかし城跡であることはよくわかっていた。この城から河辺井寺洞への抜け穴があったと聞き、その抜け穴の入口という穴が頂上から少し下りた所であったことを覚えていた。「史跡」として有名になってから一度探したが見付け得なかった。私の育った家の従弟T君(現岐阜市住)も子供のころその穴を教えられて見たことがあるといい、一度一緒に探して見ようと話したが、いままになつていて、

筆者は、大東亜戦前に朝鮮(現韓国)にて公務について、

終戦後郷里へ引き揚げて後、旧山田村、郡上高校・岐阜県などに勤め、退職後昭和四七年四月から大和村史編集をお手伝いすることとなり、同事務局と文化財関係の事務も取り扱うこととなった。

そのころ大和村では、小間見川がオオサンショウオの生息地として国より指定されていただけで、ほかに文化財的処置の与えられたものはなかった。勿論篠脇城跡も史跡としての指定はされていなかった。そのころ岐阜県城館長郷浩氏は早くから篠脇城跡に関心を寄せておられた(当時篠脇城跡実測図が作られたのも同氏のはからいであった)が、この城跡を早く「史跡」に指定するようアドバイスをうけた。

まず県の条例、文化財指定要項に倣って村文化財の指定条例・要項を制定していただき、第一番に篠脇城跡が村史跡に指定され、続いて昭和四八年一月一日、県史跡に指定されたのであった。

そのころはまだ、しの脇山麓は普通の田畑であり、登り口の田の中に表門跡と思われる三個の礎石と称する石が並んでいた(後のほ場整備工事の際にこの石の付近を調べたが何も見付からなかった)。

昭和五四年ほ場整備工事の際、東氏館跡が発見され、五五年から五八年にわたり第一回発掘調査が行われ、検出された庭園(殊に池泉部)のすばらしさから国の名勝に指定された。その後二回の追跡調査にて館跡の全貌がわかり一部の補強整備がなされ、また、古今集ゆかりの植物を植えて「古今植物園」が造成された。

なお、この名勝の対岸一帯が整備されて、東氏記念館・大和文庫、和歌文学館・篠脇山荘・ももちどり・よぶこどり・いなおうせどりなどが設置され、「古今伝授の里、フィールドミュージアム」として発展しつつある。

篠脇城跡は篠脇文化財顕彰会の骨折りで、頂上の表示板・休憩台の設置や位碑堂の補修により見違えるほど整備された。近年ここを訪れる人も多くなりつつあるが、何分にも急斜面を八百メートルほど歩かねばならぬので、足の弱い者は大変である。何とか足弱者にも登り易い方法が講じられたならばまことにありがたいことであると、つくづく思うものである。

法隆寺参詣

聖徳太子追想

畑 中 淨 園

文化財保護協会の年間行事の一つである一泊二日の研修旅行は、今年も奈良の古刹を訪ねる旅であった。四〇余名一行が最初に参拝したのが法隆寺であった。まん中に柱がある特異な中門から境内に入ると、たちまち思いは一四〇〇年の昔にさかのぼる。法隆寺といえは聖徳太子を、聖徳太子といえは法隆寺を連想する。聖徳太子と法隆寺とは切ってもきれない間にある。五重塔や金堂を眺めていると、そこに太子の姿が二重うつしのうに浮かんでくる。

観音菩薩の化身とさえいわれた太子のご一生を追想してみよう。

聖徳太子の誕生 太子は敏達天皇の三年（五七四）父用明天皇、母穴穗部間人皇女の間に誕生された。幼名を厩戸皇子（厩

の前で生まれられた。キリスが厩の前で生まれたという伝説に影響された名であるという学者もいる）といい、また、豊聡耳皇子（一〇人の訴えを同時に聞き分けられたので）ともいわれ、上宮太子（父用明天皇の住居の上方に住まれた）ともいわれている。

仏教興隆の詔 太子は二〇歳で叔母推古天皇（第三三初めの女性天皇）の摂政となり、実際の政治を執られた。推古二年（五九四）仏教興隆の詔を出し、「皇太子及び大臣に詔して、三宝を興隆せしむ。是の時、諸臣連等各々君親の恩のため、競って仏舎を造り即ちこれを寺と

クリスト教がローマに伝導されたとき、長い間激しい弾圧をうけ、ようやくローマ帝に公認されたのは、三二三年に発せられた「ミラノ勅令」であったことを思うと、日本の仏教受容が極めて容易でかつ早かったことが注目される。

太子は、高麗からの帰化僧惠慈を師として仏教の奥義をきわめ、勝鬘經・維摩經・法華經の注釈（これを三経義疏という）を行い、これが高麗に伝えられ、更に中国の唐に伝わってこれが注釈され、のち入唐僧円珍がこれを写して帰国（八五八）している。また、法華経義疏の草稿本が、皇室の御物となっていることも世に知られている。

法隆寺 太子は仏寺の建立にも力を入れ、四天王寺（五九三）、法興寺（飛鳥寺五九六）、広隆寺（峰丘寺六〇三）、法隆寺（六〇七）、中宮寺など七カ寺を建立した。

こうした中で、建立以来現存する最古の法隆寺に関しては、明治ごろから、再建説と非再建論の二説が対立して争ったが、昭和一四年（一九三九）若草伽藍と呼ばれる寺院跡が、石田茂作博士らによつて発掘調査され

て、これが『日本書紀』にいう法隆寺の焼失（六七〇）であることが立証されて、この論争は終止符をうった。法隆寺は間もなく再建された（七〇八ごろ）とはいえ、飛鳥様式をよく残存している。すなわち、

① 建物は二重の石段の上にたつ。

② 柱にふくらみがある。これをエントラスといい、ギリシヤや西インドのガンダーラの影響をうけている。

③ 地垂木が一重である。

④ 勾欄は卍崩組子といつて卍をくずした形を連ねている。

⑤ 屋根の勾配がにぶい。

境内の一角に腰をおろして、この回廊にかこまれた五重塔や金堂を眺めていると、当時の組み立てられてゆく槌の音が響いてくるように思われる。

一七条憲法 太子の仏教思想は、一七条憲法にも色濃く顕れている。その第一条には「和を以て貴しと爲し、さからうこと無きをむねとせよ云々」第二条に「篤く三宝を敬え、三宝とは仏・法・僧なり（中略）それ三宝によらずんば、何を以てか柱れるを直さん」第五条には、むさばりを絶ち、欲をすて、明らかに訴訟をさだめよ云々」第一条に「忿を絶ち、瞋をすて、人の違ふを怒らざれ、人皆心あり、心各々執るところあり、かれを是とすれば、即ち我を非とし、我を是とすれば、即ち彼を非となす。我必ず聖に非ず、彼必ず愚に非ず、共にこれ凡夫のみ（中略）彼の人はいかると雖もかえつて我が失を恐れよ云々」第一条に「群臣・百僚嫉妬あることなかれ、我既に人を嫉めば、人も亦我をねたむ、嫉妬のわずらいその極みを知らず云々」というように、仏教の説く十悪の罪を厳しく論じている。また、この一七条の中には、孔子の儒教思想も取り入れられている。太子が人材登用のために定めた冠位十二階は孔子の説である徳と五常（仁義礼智信）の項目からなり、さらに中国の五行（木火土金水）思想が影響しており、太子の博識多才には、太子の外資 太子の内政は以上如くであるが、対外的にも大きな業績をあげられた。当時中国では、三六〇余年に亘る魏晋・南北朝の分裂状態を統一した隋の文帝（五〇四）は長安に都し、仏教を信奉して善政を布

いたが、子の煬帝は父文帝を殺して即位した(六〇四)。

煬帝は、西域諸国を征服し、琉球・台湾・カンボジアを侵略、さらに朝鮮の高麗に対して三回も討伐軍を出している。太子はこのような煬帝の動きを看破されたにちがいない小野妹子の遣隋使の派遣は、このような国際状況のもとで行われたのである。

中国の正史『隋書』の「倭国伝」に、大業三年(六〇七)多利思比孤(日本の王)の使者が来て煬帝に謁見し、「海西の菩薩天子は佛法を興隆されていると、いうことを聞いて、沙門数十人をつれて仏教を学びに来ました」と言い、国書を煬帝に差し出した。その国書に「日出ずる所の天子、書を日没する処の天子に致す、つがなきや云々」煬帝はこれを見て、「蛮夷の書、無礼なるものあり、再び天子の耳に入れるな」と、妹子は恐らく死を覚悟したのであろう。ところが煬帝は、遙か東方から命がけで来た使者の苦勞を思い、その帰国に際して、裴世清ら二人をとまなわせた。妹子の一行は翌年(六〇八)四月に九州に上陸した。無事帰国の一報をうけた太子の胸はどんなであった

であろうか。妹子が無事帰った。しかも隋使が同行している。六月には淀川の河口に着いた。『日本書紀』によると、太子はかざり船三〇隻を派遣し、新築の館にむかえ入れた。八月には飛鳥の都に入る。太子はこの日、飾りをたてた馬七五匹を仕立てて一行を迎えたという。

隋使裴世清一行は、九月に帰国の途についた。この時、小野妹子は再び国使の任を負うて同行した。その国書に「東の天皇、敬つて西の皇帝に申し上げます。このたびは貴国の御使ひ裴世清が来朝して下さつて、長い間の念願がかないました。秋冷の候、ご機嫌いかがですか。当方は無事であります」(日本書紀)

この国書に初めて天皇という称号が使われ、中国の皇帝と肩を並べた同等の位置を強調していることが注目される。

この時、妹子に同行したのは、高向玄理・南淵請安・学問僧旻ら合わせて八人であった。玄理と請安は中国滞在三二年間、六四〇年に帰国、旻は滞在二四年間、六三二年に帰国した。彼等は隋唐の交替期(六一八年煬帝は臣下に殺され、唐が建国)を体験し、初唐の中央集権制度、

律令体制を学び、かつ国際都市になりつつあった都、長安の繁栄ぶりを具に見て来た。彼等が大化の改新(六四五)の立役者となったことは周知の通りである。聖徳太子の政治理念はここに実を結んだといつてよいであろう。

太子と親鸞聖人 太子は推古天皇三〇年(六二二)四九歳で

大阪府南河内太子町叡福寺)に参詣して太子の示現を得たと伝えられ、二九歳のとき、京都の六角堂(太子の建立といわれ、太子の本地といわれる観音菩薩をまつる)に百日の参籠を志し、九五~~日~~日目の晩に、太子の夢告を得て、吉水の法然を訪ねて弟子となった。聖人の和讃に、

の仰慕のほどが知られる。太子はおよそ三〇年間、推古天皇の摂政として内外に亘る幾多の業績をのこされ、推古三〇年(六二二)四九歳で病没された。

太子のために作られた天寿国曼陀羅繡帳銘に太子が日ごろ仰せられていたという「世間虚仮・唯仏是真」の語が刺繍されている。親鸞聖人はこの語の意味を「よろずのこと、みなもつて、そらごと、たわごと、まことあることなきに(世間虚仮)ただ念仏のみぞ、まことにておわします(唯仏是真)」「歎異抄後序」とのべられている。親鸞聖人の思想の中には太子の影響が深かったことが思われる。

真宗寺院の本堂には、その余間(内陣の左右の間)に、太子像がかけられている。この絵像は太子一四歳(二説には一六歳)のとき、父用明天皇の看病のため、俗服の上に袈裟をかけ、病気の快癒を仏前に祈念された姿であるといわれている。(写真参照)

時間の都合で夢殿には参詣できなかつた。法隆寺への参詣は、恐らくこれが最後であろうと、感慨深く別れをつげた。



聖徳太子絵像(十四歳)

廣大恩徳謝しがたし
一心に帰命したてまつり
奉讃不退ならしめよ

とある。教主といふのは釈迦如来のことで、聖徳太子を日本の

病没されたが、その後、平安時代中期から太子信仰が盛んとなり、鎌倉時代になると、太子像や太子像(絵画・彫刻)が多く造られるようになった。

親鸞聖人が一九歳のとき、比叡山から磯長のご廟(三骨一廟といつて、太子とその妃、母穴穂部間人王女の遺骨が納まる、

ある中で、太子和讃は二〇〇首にも及んでいる。聖人の太子へ

東常縁相伝書

拾遺愚草内五十八首

高橋義一

●常縁本の正真物か

千葉県小見川町（中世、東庄の一部）の鈴木佐さんは、同町町長のご宗子。千葉・東氏の歴史を追って十数年前から来町され、資料や情報を交換。明建神社の薪能火入式にも、毎年参加される好青年である。その佐さんが、四月一一、一二日ごろ突然来町し、東常縁の遺作品のコピー本を持参された。

●愛知県刈谷市図書館所蔵本

元禄二年木版本『東野州聞書』や「蓬蘆雑鈔」に冊する「東常縁相伝書・拾遺愚草内五十八首」などである。「拾遺愚草」というのは、藤原定家（一一六三～一二四二）が拾遺（侍従の唐名）のころ自選し、三千余首の和歌を巻物にしたという膨大なもの。二条派為世門下の四天

王の一人頼阿（一二八九～一三七二）以降、数々の注釈書が生

まれたとされる。

常縁の死は文明一六年（一四八四）三月と推定されるから、二年前の同一四年一月、「拾遺愚草」中の五八首（実は五七首）の解を宗祇に送ったことになる。五月八日、土松・佐藤委員と三人で、刈谷図書館を訪れ、同本を調査した。

●内容

同文書は、淡墨細筆のみことな達筆で、一目で老弱者のものでないことがわかり、「平常縁花押」も見なれたものとは異なっており、小僧に口述させたと言われている。

筆跡は、早速書陵部所蔵の同名本と照合する必要があるが、本物ではなからうかと推測する最大の理由に紙質が上げられる。

我々がよく町内古文書に散見する「天郡上」（典具帖）と見られる極上質の紙に酷似しているからである。

先のコピー文を予め解説していた佐藤委員の原稿中、分かりやすい歌と解を左に引いてみる（一）内は筆者の注である。

①こそもこれ春のほひに成にけり梅さく宿の明ほの空

こそも是とは、毎年かくのことにけりとは、春の感情ふかき時節となり、明はつれば人の心は万事にうつる物なれば、梅の感情ふかきはあけくれの時分也となり

②呉竹の我友はみなならへとも
独よそなる羽の林かな

竹によせておもひをのぶる心
にや、我友の官位は歴々なれとも、羽林にもおよはぬ心なるへし（羽林は近衛府の唐名で、羽林家は大中納言参議に近衛中小将を兼ねた家柄。当時飛鳥井・冷泉・六条・四条・山科等歌所の諸家）

③ぬる玉の夢は現にまさりけり

此世にさむる枕かはらて
うつつは此世の夢なり、世の夢はさめて又見る事なし、枕かはらて見る夢は現にまさりたり

となり（ぬる玉は寝る魂は夢の異称）
簡潔な名文である。その心も汲み取りがたい妖しげな光を放つ。最後の力をしばって、定家撰定歌から選び、師堯孝の説を基に解釈口述させ、最愛の弟子宗祇に披露（一見の後は焼けて書く）した、言わば常縁秘伝の一つであろう。

●町史料続編上」に追収

『大和町史料続編上』となる原稿は、すでに編集済んで教育委員会へ提出されている。

しかし、佐さんからコピーを送られた時点で、急遽『史料編』に追収出来るようにと、刈谷図書館へ出張したわけである。同館係官平野さんには、全く懇切に調査撮影コピーなどご指導頂き、本誌を通じて、厚くお礼申し上げる次第である。

●山田庄産美濃紙・天郡上

常縁時代の当時は、上質の美濃紙の主要産地だったらしいことが諸史料で分かっており、常縁や弟の建仁寺住竜統もみやげに持参している。將軍が美濃国守護に紙の調達を命じて、紙は入手困難な貴重品であった。

町内に現存する古文書の中に、実に良質な紙のあるのに驚かさ

れる。そして、「天狗上」「天郡上」と書く、紙の名称がしばしば散見される。

神路（「紙地」の文字も見ると中心に、明治初年まで多数の「紙屋」（古代からの紙工房の名称）があつて集散の間屋もあつたが、安く大量生産の洋紙に押されて潰れ、急速に生産が落ち養蚕業に主力が変わつたという。（白田尊徳氏談）

一方、美濃市周辺が「美濃紙」の主要産地として力を伸ばしてきたのは明治以降のようである。逆転的に衰微した郡上産地に、逆移出するようになった上野知・牧谷の紙問屋筋は、「郡上は上等な紙をすいていたから恥ずかしくないように」と、一帖ごとに入念にして送つたと古老は伝えている。

●書陵部所蔵同本の調査

書陵部蔵「東常縁拾遺愚草内五十八首」は、早急に調査する必要に迫られた。刈谷図書館蔵村上本との比較である。紙質・筆跡等であるが、多事多端で願望が果たせるかどうか。（五月九日急記）

心をいやす 奈良のみほとけ

井 俣 初 枝

と勉強しておくべきであったと思う。

南大門に向かう参道を歩いてみると、小学校三年生のときならった本の中に幼少の頃悪戯をして父親に叱られたとき、「穴に入つてかくれることも出来ず」といった太子六才が七才だったろうか定かではないがこの言葉が思い出された。この言葉を頭に描きながら一礼して南大門をくぐった。胸のときめきを覚える。仏法の故郷なのだ。

南大門から境内に足を踏みいれ、正面にあるのが中門である。金堂や、五重塔のたたずまいが美しい。この中門の中央に柱が建てられており、この柱をどうしてこんな真ん中に建てたんだろうと手で柱を撫でてみた。

この中門の左右にあるのが金剛力士像である。門に立ち仏法を守護している。にらみをきかせている。阿形像は口を大きく開いている。吽形は黒い。仁王様は恐ろしい顔をしているが、

どこことなくユーモアをもつておいでる。私達の心のうちをのぞき込むようにしているから「やましい心はもつとらんで」といいたくなった。

伽藍に一步踏み込むと、飛鳥

時代の建物、回廊は国宝である。外側は白壁に連子窓が組み込まれ、きつと、差し込む春の日の光が美しい影をつくることだろう。エンタシスの柱の列、雲形肘木、卍崩し勾欄との説明はされたけれどすっかり忘れてしまつていて、まったく思い出すことが出来ない。

金堂内陣には釈迦三尊像が安置されている。しんと静まり返った薄闇の中で、釈迦如来は千四百年の微笑みをつづけられていた。写真で見るとは距離感

も奥行きも違う。釈迦如来像は、聖徳太子の等身だという。

推古二九(六二二)年一二月、聖徳太子の母・穴穗部間人太后が死去した。そのことが精神的打撃となり、聖徳太子は健康を害したといわれている。推古三〇(六二二)年正月太子と妃の膳・大郎女があいついで病床に

ついた。そのためこの二人の病気が癒の祈願がつづけられ、聖徳太子の釈迦如来像を止利仏師につくらせるよう上宮王家の人々が発願したのでという。発願

したのは膳家の人々であったともいわれている。釈迦三尊像の光背にはこのように刻まれているという。仏教への信仰の力が強かったのだと思う。

人々の祈りも虚しく、二月二日に膳大郎女が死去し、妃の後を追って翌二日に聖徳太子が永眠した。太子四九歳の生涯であった。釈迦三尊像は翌年の推古三一(六二三)年に完成したとされる。以来法隆寺金堂に安置されつづけているのだという。

「世間虚仮唯仏是真」

聖徳太子のあまりにも有名な言葉だとされている。わかつたようでもわからないこの言葉の意味も正しく知りたい。

仏教が一般に流布するためには、もう一度聖徳太子に戻って太子の力にあずかって勉強していく必要があると思う。

はじめて法隆寺を訪ね仏像の柔らかな微笑みに心和ませ「生かされている」の思いとともに心のいやしをみつける旅でもあった。

みほとけの

もろ手の指に

芽吹風



法隆寺堂釈迦三尊像

念持仏を

拝観して思う

白 田 百合子

新薬師寺は、奈良の山の辺の道入口にあり、閑静な佇まいの中、境内の参道にはモチノ木が見事に真赤な実を付け陽春の光をうけて、美しく輝いていた。

新薬師寺は、聖武天皇の眼病平癒を祈願されて天平一九年（七四七）三月勅願により光明皇后によって建立された由緒ある寺で、「新」は「あたらしい」ではなくて「あらたかな」薬師寺という意味であると、しおりに記されている。

本堂の中央には土築で白漆喰ぬりの大きな円形の仏壇が作られ、本尊薬師像や一二神将像が安置されていた。土造りでも漆喰を塗ることによってあれ程までに固くなるものだと、昔の人達の知恵に感銘を受けたのでした。

法隆寺大宝殿の御厨子の中の

阿弥陀如来及び両脇侍像は、光明皇后の御母で橘夫人により造られたものであると伝えられ、御厨子の真ん中には阿弥陀如来と両脇侍がおいでになる。

蓮が池からくねって生えてきた様な蓮華の上に阿弥陀如来がお座りになり、下生印「与願の形」をとられ、両脇侍像は阿弥陀如来より小さな立像で同じ下生印の形をとられている。

御堂内がうす暗いので、じつと眼を凝らしてみると仏像の背後には天衣を風になびかせた蓮華の上に幾体もの仏像が浮き彫りにされているのが見える。

阿弥陀如来のお顔は口角を吊り上げ、かすかに微笑みを浮かべておられる様に感じられ、頭髪は小さな仏像の割には渦が大きく平らに巻かれているのが特徴の様であった。

金堂の薬師如来座像は、用明天皇が病になられた際に自ら病氣平癒を祈って寺と薬師像を造ることを発願されたが、何らかの理由で果たせず天皇の崩御後、推古一五年に推古天皇と聖徳太子によってこの像が造られたと言う。

金堂中の間に安置されている釈迦如来及び両脇侍像は、推古三〇年正月聖徳太子の病に際し、病を転じて寿命を延ばすことを願って皇后王子諸臣らが太子と等身の釈迦像を作ること発願したが、その願いも空しく太子と后は相次いで二月に世を去られた。翌三一年三月に釈迦三尊が完成されたという念持仏だということである。

この文化財の旅行には有り難い事が二つあります。多くの御仏を拝観できて有り難く、もう一つは河合先生の豊富な知識と解りやすい語り方で説明をしていただける事です。予備知識も持たないで出掛けてしまう私には誠に有り難く勉強になり、感謝いたしております。

今回数多くの念持仏を拝観し「与願」を信じて、しっかり拝んで参りました。

何時の世にも「他人を思い」

「夫を思い」「子を思う」思い その心を見習って生きていきたい遣りの心を持たれた様に、私も と思っております。

春日大社付近にて 百合子

春日路に 我がバス見詰め
なに思う 寂寞の鹿 春の寒き日

浄瑠璃寺にて

山寺の 回廊の隅 ひと枝の
つばきのいろに 心やすらぐ



浄瑠璃寺

奈良京都を歩いて

小池久江

静かに文化財に携わる先生方はその道の大家だと思えます。

大先輩諸先生方に同道し、案内されながら文化財の旅は何と倅せなことに、私はこの旅が一番嬉しい。

見るものはその場限りかも知れないし、何を聞いても「右から左」かも知れないけれども、歩きながら、誰方に何を聞いてもすぐ分かりやすい答が返ってくる。仏像も、書も、建築も、草木に至るまで、気楽に尋ね気楽に教えて頂ける。

パスと言う一つの囲いの中に入れば失礼な言い方かも知れな

いけどみんなな友達、まわりの席から聞こえてくる色々な話し声も、文化財に関係した事柄が多く勉強になる。ボソボソと隣の人との話も近所にいながら仲々話す折りのないこの時間を、本当に嬉しく思いました。

「法隆寺五重塔」と習字の時間や国語で「修行者と羅刹」の形で教わった仏法、「いろはにはへど」止利仏師の話も小学生の頃がふと過ぎりなつかしく思い出される。

仏像にはそれぞれの特徴や魅力があつて、あきることなく拝観出来ます。特に百済観音の美しさに見惚れ、複製であることに尚驚き、このように美しく作り上げた人の心にも触れたような、この美しい出逢いに感謝すると共に、浄園先生のユニークな言葉が楽しく心に残っている。

天平の留学僧の苦労話や運命を描き唐の名僧鑑真和上の来朝の様子など「天平の薨」の中の記憶が頭の隅に残っていました。

椿散る木下過ぎれば明るみに和上御廟はひっそりとなり

山の辺りの道、このあたりはゆつくり散策したい気分の新薬師寺の国宝の守護神に見守られて一巡し、せめてローソク一本上げて仰いで来ました。馬酔木の参道を漫る歩きたい気分、なのに小雨、浄瑠璃寺の門前に貝母が楚楚として今丁度茶花になりたそうな様子で、控え目にうつむいて私達を迎えてくれる。

観光客も少ないせいもあつて、静かなただずまいと、小雨に濡れた木々、小鳥の囀り、何と倅せな一刻、九体仏は勿論のこと吉祥天の美しさは時代を経て尚彩色も艶やかにその姿を止めている。

池の面に赤き椿を浮かばせて
亀も蛙も息止めしませ

いづれも初めての処ばかり感動の連続。

二条城御殿の唐門に権力のすごさを感じて中に入れば、広間書院各部屋の天井欄間、襖に至る豪華なすべてにただ唯、すごい一言、心の内に一つ一つ運ばれたであろう基盤、礎石、この巨大な建物に携わった多くの人々の苦労がしのばれ、時代が

変わってやがてテレビの中で大政奉還の場面が再現されるのであろうと、ひそかに思いながら、多くの人々入場者によって磨き上げられた、うぐいす張りの廊下を後にする。

足に自信のない方には一寸大変だったかも知れませんが。すべ、て大きなものに出逢え、今度の旅は忙しかったけれども楽しい旅でした。お世話下さいました先生方から感謝申し上げます。



小説「敦煌」を書いた井上靖さんは、法隆寺金堂壁画の飛天に驚き、敦煌をはじめ中国中の飛天ばかりを見て回った。そして金堂の飛天は、敦煌莫高窟から日本に飛来して、最高の技芸に輝いたものだと言った。——写真は模写復元された飛天(極彩色)(高橋義一)

平成九年度 事業報告



唐招提寺

平成十年度 事業計画(案)

- 4月 執行部会開催、文化財収蔵展示館(仮称)建設計画策定の基礎調査。
- 5月 執行部会、役員会(総会の事業他)監査会の開催。会報「文化財やまと」第23号の発行。文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会執行部会、同委員会の開催。
- 6月 執行部会、総会ならびに研修会(講演会)の開催。演題「岐阜県の女性史について」講師 前郡上北高校校長 石神 堯生先生
- 7月 執行部会の開催。明建神社の桜並木の手入れ及び、阿千葉城跡管理作業の奉仕活動、(桜並木については地元団体の行う、
- 8月 薪能協賛及び文化財関係の来客に対応。
- 9月 執行部会の開催。
- 10月 役員会の開催。日帰り研修旅行の計画、町民祭、サミットに参加。
- 11月 執行部会の開催、日帰り研修旅行の実施。
- 12月 執行部会、役員会開催。一泊研修旅行計画(懇親会)。
- 2月 執行部会開催。
- 3月 役員会開催、一泊研修旅行の実施、文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会の開催。
- 4月 枯枝病梢の防除作業に協力)文化財収蔵展示館(仮称)設置促進委員会の開催。
- 5月 薪能協賛及び文化財関係の来客に対応。
- 6月 執行部会の開催、文化財収蔵展示館(仮称)建設計画策定の基礎調査。
- 7月 執行部会、役員会(総会の事業他)監査会の開催。会報「文化財やまと」第23号の発行。文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会執行部会、同委員会の開催。
- 8月 薪能協賛及び文化財関係の来客に対応。
- 9月 執行部会の開催。
- 10月 役員会の開催。日帰り研修旅行の計画、町民祭、サミットに参加。
- 11月 執行部会の開催、日帰り研修旅行の実施。
- 12月 執行部会、役員会開催。一泊研修旅行計画(懇親会)。
- 2月 執行部会開催。
- 3月 役員会開催、一泊研修旅行の実施、文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会の開催。

- 5月2日 執行部会。文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会の設置の構想について。天然記念物明建神社桜並木樹勢の若返りについて。
- 5月5日 執行部会。役員会の開催と平成9年度総会および会報「文化財やまと」の原稿募集について。
- 5月20日 役員会開催。平成8年度事業、会計報告について。平成9年度事業計画、予算案について。平成9年度総会の開催について。文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会発足への審議他。15名
- 6月1日 会報「文化財やまと」第22号発行。
- 6月6日 平成9年度総会開催。総会事案のほか任期満了による役員の見直し。記念講演 郷土史研究会と共催演題「長者の話」講師 八幡町文化財保護協会会長 佐藤とき子先生 46名
- 7月3日 天然記念物七代天神鳥居杉樹勢の衰退と樹下付近における道路改良工事の係わりについて現地調査。
- 7月8日 町当局をとおし道路改良工事の施工に対し、前記七代天神鳥居杉に係わる適切な保護方につき、要望書を提出。
- 7月22日 執行部会、東氏館跡、阿千葉城跡の清掃および明建神社桜並木の若返り作業等奉仕活動にかかる準備等打ち合わせ。阿千葉城跡の清掃奉仕を実施、館跡庭園では今年も池泉の浚渫を重点的に行う、また同日明建神社桜並木の樹勢の衰退を認める最古木を含む3本に対し、長野県高遠城跡に於ける若返り手法を模して、桶型枠に土盛りを行い新根の発生を期待。36名
- 8月7日 薪能「くるすざくら」協賛。
- 9月7日 執行部会。文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会委員の委嘱について。役員会の開催について。
- 9月14日 文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会委員17名を委嘱。
- 10月7日 執行部会。役員会の開催、町民祭参加の文化財(文化財写真、出土中国古銭)出展計画、日帰り研修旅行、文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会、欠員中の副会長選任等につき打ち合わせ。
- 10月8日 役員会。秋の日帰り研修旅行の実施、文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会委員の嘱託、町民祭参加の文化財(発掘中の中国古銭、指定文化財写真)の出展計画。本会の副会長(欠員1)の選任他。16名
- 10月30日 展示会場準備。東海北陸自動車道八幡白鳥間開通記念のため町民祭会場は、大和インターチェンジとなり、展示会場西小学校に文化財の出展準備完了。10名
- 11月1日、2日 指定文化財中国古銭3口計約18、500枚及び町指定の文化財の大幅写真を展示、会場の説明と管理にあたる。延20名
- 11月21日 第一回文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会開催。15名
- 11月29日 秋の日帰り研修旅行実施。行き先京都市右京区妙心寺退藏院、大心院、高山寺 52名
- 12月8日 執行部会。役員会の開催。春の一泊二日研修旅行他について。
- 12月20日 役員会。平成9年度事業、会計中間報告および春の一泊二日研修旅行他について。
- 12月26日 第2回文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会開催。委員長 土松新逸 副委員長 遠藤賢逸、森忠敬各氏を選任。16名
- 1月12日 執行部会。第3回文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会開催の件、一泊二日研修旅行の件、文化財の県指定申請の検討協議。
- 1月25日 第3回文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会をやまつけに於いて開催、当面の活動方針につき協議。16名
- 1月29日 執行部会。展示館先遣地視察について他協議。
- 2月6日 文化財収蔵展示館(仮称)建設促進委員会。名古屋市博物館(冷泉家展)御高町中山道みかけかん視察。20名
- 2月18日 役員会。一泊二日研修旅行実施他。19名
- 3月26日 一泊二日研修旅行実施。奈良市法隆寺、京都市二条城他 42名

06月25日 奈良県立博物館へ視察
11月「比較古、高野山(2回)」「夢観(日帰り)、予足(1)」「3名

文芸欄

短歌

村瀬 弥一

少年の犯せし罪は重くとも大人
社会の悪しき投影

ナイフもて師を刺殺せし少年を
育てし親の責なお重き

数ヶ月単筒に蔵いし腕時計しば
しも休まず時を刻めり

舗装せし道路のわきの割れ目よ
りもえ出ぬかよわき花の命が

花ふりやます

矢野原 幸子

宝蔵の佛にたちてたまゆらをか
なしきまでの安らぎにゐる

ふたたびの逢ひのときめきまみ
ゆれば吉祥天女のあかきくちび
る

頻婆果といふ果実はしらず知ら
ねども天女の唇のごとき色かも

まろやかにゆるやかにおはす九
体佛安心立命といふ言葉ありき

戒壇の隅に千歳をふまれぬて邪
鬼はいがいにかかしあかるし

涙などかかれてしまったと天邪鬼
かんらんかんらと足下にわらふ

外にいでて遊べよ花のふるそと
へ幼き邪鬼に春燦々

歌詠むもよまぬもしばし目瞑り
て飛天の楽のきかまほしけれ

「頻婆果」インドの果実の一種。
經典によると、仏陀の唇は「
赤紅ニシテ頻婆果ノ如シ」

村井 正蔵

旅ゆく人の口ずさみ

もうきりつけないと念じても青
葉と俱に忘念のわく

今日もまた業に追われて暮れて
ゆくそのままなりと聞こえたれ
ども

この道は厄入道のゆける道され
どここまで道の尊し

桑田 静子

世を挙げて若草若葉萌ゆる今日
孫結婚の式典に逢ふ

神宮の祝詞の声につつしみて孫
結婚の挙式始まる

壇上に立ちし花婿花嫁にうれし
涙のあふるる我は

はるばると九州よりの学友のご
祝辞いただく孫の幸せ

日置 智恵子

日毎過ぐ生活の中に聞きなれて
見なれ気付かぬ季節の移ろい

悔しさを味方に付けて力とす
踏まれて負けぬ雑草のごと

背伸びせず土にへばりて咲きて
いる冬のタンポポわたしであり
たい

午後四時に窓を開きて迎え入る
光は部屋の奥にとどけり

もろき橋渡ればこわれ流れ行く
人の世の橋いくつ渡らむ

法隆寺参拝

土松新逸
浄瑠璃寺

金子政子
山守りて

新薬師寺天平期の傑作、薬師如来と眷属十一神
天平の花の舞とや十二神

山下照代
天平のいらか

黒岩 きくゑ
涅槃西風
花うぐひ群れ瀬溜りの盛り上り
竹の子の切端詰まりて皮を脱ぐ

東方の薬師如来に救われて西方
阿弥陀にお迎えらるる

山守れば手入れの跡の残りおり
父祖偲びつつわらびを折るも

さくら満ち飛天たけなは
法隆寺

京都駅階のぼりつめ春の雨

逆吊の洗濯物に涅槃西風

西方の阿弥陀如来に迎えられ安
楽浄土へ参るしあわせ

枝打つと立てたる梯子そのまま
のけやきの大樹に亡夫のまぼろ
し

花吉野佳人にぶつかる
ことなかれ

大和路の仏教文化花の雨

逆吊の洗濯物に涅槃西風

衆生をばやさしく迎えそれぞれ
に導きたまう九体仏様

ひそと咲く山つつじの紅目に泌
むる共にめでたる人は今亡き

垣根なる艶やかな黄色
れんげうや

骨太く和上おん影さわやかに
九体仏つつみ参道あしび咲く

満天星の鈴ふれ合へり
鳴り合へり

西方の御堂に静かに並びます阿
弥陀如来は九品の来迎

来迎九体ほとけの御顔はまこと
うるわしほの光りつつ

高遠城跡流人絵島邸辺りの落花猛烈
高遠の絵島の落花よ杯狂ふ

石仏の御手にすがりて萬若葉
滴れる緑に百度石も濡れ

三伏の木の香水の香城つつむ
田を植うる一揆の里や高速道

来迎九体ほとけの御顔はまこと
うるわしほの光りつつ

俳句

日置 繁

石 仏 桑田 和子

奈良のみほとけ

井俣 初枝

猪 垣 加藤 登美枝

高橋 義一

はな・はな花

新居へ歓迎会

滴れる緑に百度石も濡れ

春風と心許して古寺巡る

猪垣にそいて歩むも落葉みち絨
緞敷くごと病む足かろし

つれ無きやうなじ振るのみ
黄水仙

東殿が新居へ来栖桜かな

三伏の木の香水の香城つつむ

春風と心許して古寺巡る

春雨に濡れて行こうかななどと
どけ並びて歩む雨の日の旅

全部探幽を中心に狩野派画くふすま絵
花の廊探幽をどる二条城

足羽川花引つって盛りなり
福井市

田を植うる一揆の里や高速道

ひもすがら奈良のほとけと
若葉風

口紅をさしたる様に水仙の花弁
愛らしたれを待てるや

浄瑠璃寺九体寺、藤原氏全盛期弥陀如来九体の聖像
浄瑠璃の花謡ひ坐す九品仏

踏む人も掃く人もなき落ち椿

落椿つめたきしめり浄瑠璃寺

會員名簿

(順序不同)

一 劍 一

山下運平 <small>顧問</small>	八八・二四〇六	野田八重子	八八・二一六二	平沢 勤 <small>理事</small>	八八・三九三七	土松新逸 <small>顧問</small>	八八・二七三一	滝日準 <small>理事</small>	八八・二七〇五
勝美 <small>顧問</small>	八八・二〇三一	高橋叙子	八八・三九七二	萬場 一	八八・二四四一	遠藤賢逸	八八・二二二一	粟飯原常人	八八・二二二一
村瀬喜八	八八・二二二八	河合芳江	八八・二二四六	畑中淨園 <small>顧問</small>	八八・二四四一	渡辺明夫	八八・二六九五	土松康二	八八・二七二九
河合俊次 <small>理事</small>	八八・二二四六	佐藤富貴子	八八・二八八九	畑中真澄	八八・二四四一	木島三郎	八八・三三九〇	日置貞一	八八・二六六二
畑中澄子 <small>理事</small>	八八・二二五〇七	山本みね子	八八・二六七一	石神莞生	八八・二四一三	矢野原吉夫	八八・二一三九	土松貞二	八八・三三八〇
畑中定夫	八八・二二六八	野田三枝子	八八・三二六九	稲葉春吉	八八・二五〇三	村瀬弥一 <small>理事</small>	八八・二六〇二	日置 昇	八八・三三六六
小池久江	八八・二二七六	古池房江	八八・三二五三	黒岩きく多	八八・二四六〇	渡辺文子	八八・二六九五	遠藤米吉	八八・三三三七
山下ふみえ	八八・三二二七	山田しずえ	八八・三二九六	寛 明代	八八・二五三二	山内喜久子	八八・二六一六	遠藤光平	八八・三九八一
加藤正恵	八八・二二〇七	岩崎扶美子	八八・三二五二	三島秋男 <small>理事</small>	八八・二四六一	遠藤富貴子	八八・二二二一	遠藤周一	八八・二八九〇
高橋 明	八八・二四八八	大間見 一	八八・三二五二	桑田和子	八八・二四一九	河 辺 一	八八・二二二一	滝日義一 <small>理事</small>	八八・三〇六二
日置照郎	八八・二〇七二	村井正蔵 <small>監事</small>	八八・二二二二	桑田渥見	八八・二四四六	清水幸江 <small>理事</small>	八八・二〇一九	滝日 治	八八・三四〇六
加藤文蔵	八八・二八〇二	青木新三	八八・二四三六	桑田信夫	八八・二四一八	横枕千代子	八八・二三四九	田口勇治	八八・三九五〇
佐藤光一 <small>會計</small>	八八・三二〇一	日置 繁 <small>書記</small>	八八・二二五四	黒岩弘美	八八・二四五八	清水テル子	八八・二〇二一	斎藤太門	八八・三九二二
田中 和久	八八・二二〇〇	大野紀子	八八・二二二〇	井俣初枝	八八・二七五八	前田 孝	八八・二二〇一	松森 茂	八八・三九二二
高橋義一 <small>理事</small>	八八・三二七九	野田英志 <small>理事</small>	八八・二二八五	青地正男	八八・二四四七	前田 鈴	八八・三六六六	加藤一男	八八・二八七〇
河合芳英	八八・二二〇四	小野江選量 <small>理事</small>	八八・二二七二	大井静子	八八・二二三八	白田とも子	八八・二二五〇	清水 定	八八・二七一一
加藤小次	八八・二二二九	清水 一作	八八・三〇八六	大井正明 <small>理事</small>	八八・二八九四	白田百合子 <small>理事</small>	八八・二〇四六	日置元衛	八八・三四一七
奥村千代子	八八・二〇二二	池田充彦	八八・三〇九〇	旗 等	八八・二七五九	前田和美	八八・三六六六	粥川 溜	八八・三三七八
武藤正文 <small>理事</small>	八八・三一九〇	小野江勉	八八・二二七五	桑田アサ子	八八・二四三九	岩谷ひとみ	八八・二六八三	本田欽一 <small>理事</small>	八八・三一六〇
田仲龍子	八八・二二六六	池田道子	八八・二八七九	井上妙子	八八・三三〇八	岩谷千代子	八八・二二一一	野田嘉明	八八・三〇四三
山下照代	八八・二四〇六	日置智恵子 <small>理事</small>	八八・三〇五二	沢原 勝	八八・三三五一	横枕七右衛門	八八・二三四九	尾藤佐紀子	八八・二二五三
畑中節子	八八・四一五六	坪井政夫	八八・四〇九二	山田武司	八八・二四七五	岩谷さち	八八・三二四八	加藤登美子	八八・二八七〇
佐藤八重子	八八・三二〇一	松井賢雄 <small>理事</small>	八八・三九九一	山田和美	八八・三六三一	尾藤元子	八八・二二四七	滝日和子	八八・三〇六二
畑中文字	八八・三三四一	古田 忠	八八・四〇九〇	徳 永 一	八八・三六三一	前田とせ子	八八・二二〇一	遠藤甲子男	八八・三九三五
畑中初枝	八八・三四七四	藤代順行	八八・三〇六〇	木 島 泉 <small>理事</small>	八八・四一八二	岩谷ゆう	八八・二二三八	早瀬ふみ子	八八・三三二七
新蔵 守	八八・二二三五	大野 一 道	八八・二二三〇	鷺 見 清 <small>理事</small>	八八・二〇〇五	神 路 一	八八・二二三八	田口もと子	八八・三九五〇
		玉木吉郎	八八・三二四一	鷺 見 おと	八八・二一八九	森 忠敬 <small>顧問</small>	八八・二〇八三	栗 巢 一	
		青木ふじ枝	八八・二二〇三	直井すゝ江	八八・三三九二	白田尊徳	八八・三三三〇	島崎増造 <small>監事</small>	八八・二二二六
		小野木花子	八八・二七四七	矢野原幸子 <small>理事</small>	八八・二〇七七	羽生 清	八八・二二七一	増田洋子	八八・四〇四一
		青木ユリ子	八八・三四七七	水野志づ子	八八・二六一〇	山田真人 <small>理事</small>	八八・二二一四	寛政之助 <small>理事</small>	八八・四〇三一
		日置哲夫	八八・四五一九	山内孝一	八八・二六一六	牧 一	八八・二二一四	中山周左エ門	八八・二七二八
		小間見 一		木島洋女	八八・二五九一	金子政子	八八・三四二六	武田信康	八八・二二八四

石井敏子	遠藤利雄	雉野尚子(理事)	此島修二(理事)	直井篤美	奥田昌明	田中篤	森数雄	山田昌枝	山田長次	須甲甚一	森藤雅毅(理事)	島	鷺見昭三	立石春枝	佐尾チドリ(理事)	下広茂一	森下正則	有代和夫	有代真一	名血部	平沢える	稲葉君枝	清水久子	歳藤堅正	清水行雄	清水克巳	細川優(理事)	野田光誠	鷺見豊夫
八八・二五〇二	八八・三五六四	八八・三五六四	八八・三六五九	八八・二六二二	八八・二五二〇	八八・二七九二	八八・二五五四	八八・三六四八	八八・三六四八	八八・二六六七	八八・二六八四		八八・三四三一	八八・三三八五	八八・三五四四	八八・三八九五	八八・三四一三	八八・二二〇一	八八・三七九一		八八・三八七三	八八・二八六三	八八・三九〇八	八八・三九七九	八八・二八六二	八八・二八六一	八八・四〇二七	八八・二七八八	

平成9年度 決算書

平成10年度 予算(案)

(収入の部) (単位:円)

(収入の部) (単位:円)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	154,763	154,763	0	
会費	1,806,000	2,172,800	366,800	
会費	316,000	324,000	8,000	正会員 2,000×154 家族会員 1,000×16
特別会員費	1,490,000	1,848,800	358,800	日帰研修 408,000 宿泊研修 1,103,000 役員会 40,000 奈良県美 246,800 促進委員会 15,000 研修 36,000
補助金	80,000	80,000	0	
寄付金	1,000	49,400	48,400	土松会長他
諸収入	237	148	△89	普通預金利息
合計	2,042,000	2,457,111	415,111	

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
前年度繰越金	19,260	154,763	△135,503	
会費	1,937,000	2,172,800	△235,800	
会費	325,000	324,000	1,000	正会員 2,000×155 家族会員 1,000×15
特別会員費	1,612,000	1,848,800	△236,800	日帰研修 8,000×40 宿泊研修 28,000×40 役員会 2,000×20 促進委員会 6,000×22
補助金	100,000	80,000	20,000	
寄付金	1,000	49,400	△48,400	
諸収入	740	148	592	普通預金利息
合計	2,058,000	2,457,111	△399,111	

(支出の部) (単位:円)

(支出の部) (単位:円)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費	120,000	78,662	△41,338	
総会費	50,000	49,480	△520	
役員会費	70,000	29,182	△40,818	
事業費	1,765,000	2,182,807	417,807	
研修費	1,590,000	2,009,307	419,307	日帰研修 408,460 宿泊研修 1,176,553 役員会 48,038 奈良県美 272,717 促進委員会 46,761 研修 56,778
会報発行費	75,000	73,500	△1,500	
事業費	100,000	100,000	0	文化財展示費
事務局費	6,000	13,260	7,260	
消耗品費	2,000	0	△2,000	
通信費	3,000	13,260	10,260	
旅費	1,000	0	△1,000	
県本部会費	72,000	73,000	1,000	
積立金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予備費	19,000	30,122	11,122	
合計	2,042,000	2,437,851	395,851	

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
会議費	80,000	78,662	1,338	
総会費	50,000	49,480	520	
役員会費	30,000	29,182	818	
事業費	1,832,000	2,182,807	△350,807	
研修費	1,747,000	2,009,307	△262,307	日帰研修 320,000 宿泊研修 1,120,000 役員会 40,000 促進委員会 132,000 研修助成 135,000
会報発行費	75,000	73,500	1,500	
事業費	10,000	100,000	△90,000	奉仕作業等
事務局費	2,000	13,260	△11,260	
消耗品費	1,000	0	1,000	
通信費	1,000	13,260	△12,260	
旅費	0	0	0	
県本部会費	73,000	73,000	0	
積立金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予備費	11,000	30,122	△19,122	
合計	2,058,000	2,437,851	△379,851	

収入 2,457,111円 — 支出 2,437,851 = 19,260円
(次年度へ繰り越し)

積立金 合計金180,000円(平成7年度、8年度、9年度、各60,000円)

編集後記

● 近ごろエルニーニョ現象という、むつかしい言葉が目につきます。

東南太平洋の赤道あたりの水温が異常に上昇する現象だそうで、世界的な異常気象をもたらすものとされています。そのせいか昨今の高温はどうも普通ではありませぬ。梅も桜も例年になく早く咲いて、散ってゆきました。

● 地球の上に仮住まいしている私達は、あまりにも地球をいため過ぎてはいないでしょうか。● 気象ばかりでなく、このごろの世相も、何か異常で、普通ではないような気がします。

● 会報二三号をお届けします。今年の一泊研修旅行は、法隆寺・唐招提寺・新薬師寺・浄瑠璃寺・京都駅ビル・二条城など、豪華なものでした。本号の見学記を味読して下さい。

● お忙しい中を寄稿して下さい。● 会員の皆様方のご健勝を念じてまして後記といたします。

(畑中記)